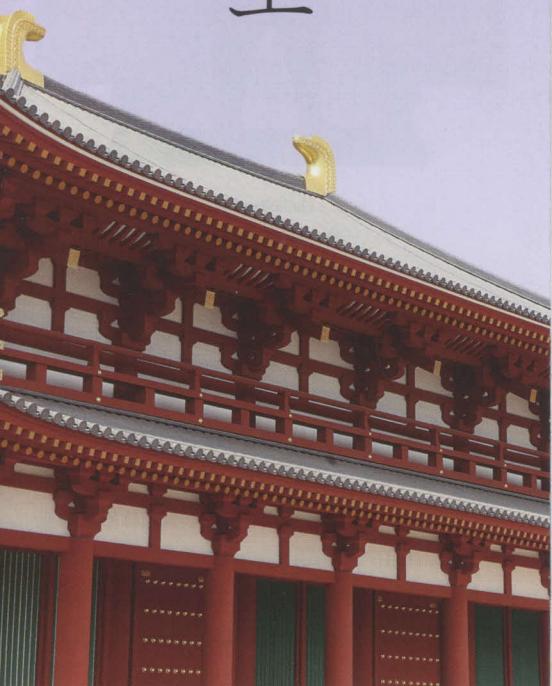


奈良 興福寺 中金堂

Head Temple of the Hossō School KOHFUKUJI

Central Golden Hall



興福寺 中金堂

年中無休

9時～17時(入堂は16時45分まで)



興福寺は、藤原氏の氏寺として和銅3年(710)の平城遷都とともに創建されました。五重塔、三重塔、東金堂、南円堂、北円堂などの建造物、阿修羅立像や銅造仏頭、無著・世親菩薩立像、金剛力士立像など数多くの国宝・重要文化財が現在に伝わります。また、『天平の文化空間の再構成』を合言葉に、境内整備事業を進めています。

法相宗大本山 興福寺

〒630-8213 奈良市登大路町48

Tel (0742) 22-7755

<http://www.kohfukuji.com>

興福寺中金堂

THE KOHFUKUJI
CENTRAL GOLDEN HALL



拝観券

大人
ADULT

2019. 06. 12

一般現 0500

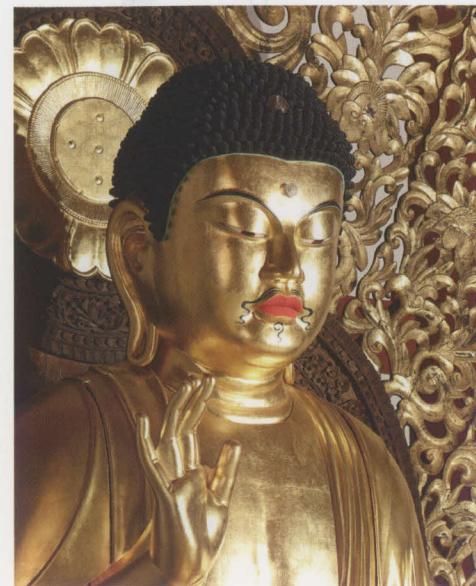
法相柱

高さ 約6.8m
周囲 約2.45m
岩絵具 紙本着色
祖師画貼上げ
平成28年(2016)
平成30年(2018)



木造釈迦如來坐像

像高 2003.9cm
赤尾右京作 桧材 寄木造 漆箔 影眼
文化8年(1811)・江戸時代



Shaka Nyorai (Edo Period)

伝統ある興福寺本尊

中金堂創建当初の本尊は、藤原鎌足が蘇我入鹿の打倒を祈願して造立した釈迦如來像と伝えます。現在安置される像は5代目。平成30年の再建にあわせ、修理されました。二重円光の透かし彫りの光背をつけ、宣字形の裳懸座に結跏趺坐します。左手は膝の上で掌を上に五指を伸ばし、右手は臂を曲げ五指を伸ばし前方に向けます。



法相の教えを伝える

法相宗の祖師を描き、教義の系譜・伝灯を示します。創建堂宇の柱に描かれ、焼失と再建を繰り返す中、後世まで引き継がれていた「礼拝の対象」です。

1 無著菩薩	2 世親菩薩	3 護法論師	4 戒賢論師
5 玄奘三蔵	6 慈恩大師	7 潤州大師	8 濡濮大師
9 玄昉僧正	10 善珠僧正	11 別當行賀	
12 真興上綱	13 権別當藏俊	14 解脫上人	

中金堂は藤原不比等が興福寺の最初の堂宇として、和銅3年(710)の平城遷都と同時に創建しました。創建当時の規模は奈良朝寺院の中でも一級であったと言われています。当初は藤原鎌足ゆかりの釈迦如来を中心、薬王・薬上菩薩、十一面觀音菩薩二躯、四天王、さらに養老5年(721)に橘三千代が夫不比等の一一周忌供養で造立した弥勒淨土の群像が安置されていました。

創建より6回の焼失・再建を繰り返し、享保2年(1717)に焼失した後は財政的な問題により文政2年(1819)に規模を縮小した「仮堂」を再建。その後は老朽化が進んだため、平成12年(2000)に解体。発掘調査の後、平成22年(2010)の立柱式、平成26年(2014)の上棟式を経て、平成30年(2018)に再建落慶を迎え、創建当時の様式で復元されました。

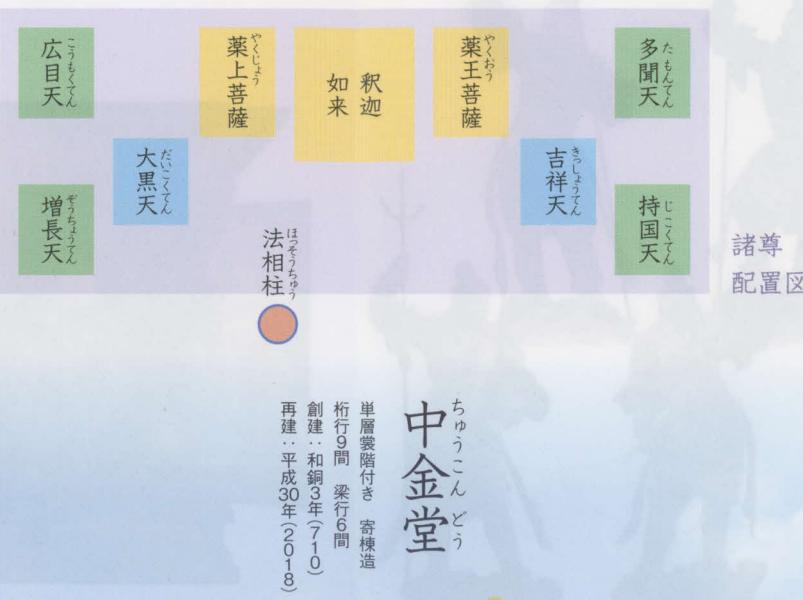


PHOTO: 飛鳥園、堀出恒夫(法相柱)

重要文化財

木造
大黒天立像

像高 93.8 cm
檜材 一木造 彩色 影眼
鎌倉時代



Daikokuten
(Kamakura Period)

重要文化財
厨子入り木造
吉祥天倚像

像高 64.3 cm
厨子高 102.0 cm
寛慶作 命尊筆
檜材 一木造 彩色 影眼
南北朝時代



Kishshōten
(Nanbokucho Period)

重要文化財
厨子入り木造
吉祥天倚像

像高 64.3 cm
厨子高 102.0 cm
寛慶作 命尊筆
檜材 一木造 彩色 影眼
南北朝時代



The Four Heavenly Kings (Kamakura Period)

木造
四天王立像

桂材 寄木造 彩色 影眼
像高 197.2 cm
鎌倉時代

国宝

重要文化財
木造
藥王・藥上菩薩立像

像高 薬王菩薩像 362.0 cm
薬上菩薩像 360.0 cm
桧材 寄木造 漆箔 影眼
建仁2年(1202) 鎌倉時代



Yakuju Bosatsu
(Kamakura Period)

Yakuō Bosatsu
(Kamakura Period)

心と身の病を治す

良薬を人々に与え、心と身の病気を治した兄弟の菩薩。釈迦の脇侍として薬王・薬上を置くのは古式と言われています。両像は鎌倉再興期に建てられた西金堂の本尊（釈迦如来：現存の木造仏頭）の脇侍でしたが、享保2年（1717）の焼失後、中金堂の本尊脇侍として迎えられました。豊かな肉づけ、整然とした姿に、奈良時代の乾漆像を思わせます。

鎌倉再興期の傑作

いずれも舟を履いて岩座に立ち、力強くダイナミックな動きが特徴です。近年の研究により、像の肉身色などから、從来持国天と呼んでいた像は增長天、增長天は広目天、広目天は持国天であることがわかりました。かつて南円堂に安置されていた四天王像でも、もとは北円堂にあったという説がありますが、断定には至っておりません。*持国天(1)・增長天(2)・広目天(3)・多聞天(4)

極彩色の吉祥天曼荼羅

吉祥天はヒンドゥ教の女神で、仏教に取り入れられてからは美と幸運、富と繁栄、財産と智恵を授ける神として信仰されるようになります。彩色など表面の仕上げが良く残っており、厨子の扉には梵天・帝釋天、奥壁には七宝山図が極彩色で描かれます。台座裏の墨書銘によると本像は暦応3年（1340）に施入され、中金堂に安置したことが分かっています。

財宝神として信仰

通常、大黒天は「打ち出の小槌」を持ち、円満な顔で俵の上に乗る姿を目にしますが、それは後世に流行した容貌です。元々は大自在天の化身として、怒りの顔をした厨房の守護神でした。本像は厳しい表情を残し、頭巾をかぶり、短い袴をつけ、袋を左肩に背負って直立します。表面には鑿跡が残り、内削りを施さず、一材から彫出する丸彫りの像です。

興福寺中金堂

興福寺は、和銅3年(710)に飛鳥から現地に移築
造営されて以来、焼失と再建を繰り返しながら
1300年もの歴史を刻んでいます。

中金堂創建当時の規模は奈良朝寺院の中でも第一級であったと言われています。7回の焼失・
再建を経て、創建当初の天平様式の姿に復元するべく再建事業が進められ、平成30年(2018)、
300年ぶりに再建、落慶を迎えました。

内陣は釈迦三尊などの尊像、法相宗の祖師を描いた「法相柱」の10点で構成されています。

これら至宝の仏教文化の真善美に静かに心をお寄せ下さい。

注意事項

- 文化財の写真撮影、スケッチならびに万年筆、サインペン等の使用はお断りします。
- 文化財には手を触れないで下さい。
- 混雑時には入堂規制がございます。
- 堂内では係員の指示に従って下さい。
- 一回限りの拝観となります。再入場はできません。
- 文化財保護のため、大雨・台風などの場合は閉鎖することがあります。

